

東京大学海洋研究所



ニュースレター

No.15 2007.3

●退官にあたって

海洋研究所での30年を思い起こしてのあれこれ

海洋化学部門生元素動態分野 教授 小池 勲 夫

退職に関する書類を見て海洋研究所に助手で就職してからすでに31年が過ぎていることに改めて思いがいたった。大学院の修士時代から勘定するとこの研究所にお世話になったのが40年近くになる。私の世代は海洋研究所での第二世代に当たり教員で大学院から研究所に入った人が多かった頃で、教員・学生とも研究船を使って新しい海洋学に取り組むという気負いが全体に感じられる時代であった。私が研究テーマとした海洋の生物地球化学という分野は、世界的にも比較的新しい研究分野で、様々な研究背景を持つ研究者が参入しており、学際的な色彩が強かった。学部学生の頃からフィールドでの科学を志向し、理学部の地理から植物へ、それから海洋研究所へとさまよったが、化学的な分析手法を使って海洋現場での窒素の生物活動による循環を解析する研究は面白く、のめりこむのに十分な研究対象であった。

特に院生の頃からカナダ、バンクーバー島での長期にわたる共同研究に参加するチャンスを得て、アメリカ、カナダ、ヨーロッパの生物海洋学、あるいは生物地球化学の一流の研究者と生活を共にしながら仕事をし、論文を書く経験を得たことは、その後の研究生活を続ける上で精神的にも実質的にも大きな支えとなった。この共同研究で世話になったスクリッps海洋研究所の研究者の

紹介で、スクリッpsの研究船による南極海の航海も含めて足掛け2年に及ぶラホイヤでの滞在が可能になった。また、80年代の終わりにスタートしたJGOFS-SSCへの参加など研究生活の節目、節目



が、このカナダでの何年間での体験と結びついている。このことを考えると学生を海外に積極的に出してくれた指導教官の有り難さを今さらながら痛感する。国内、海外を問わず良い研究上の先生、先輩、友人、後輩に恵まれることが、大学の研究者という一見自由な立場でも極めて大切なことは言うまでもないからである。

私が研究を始めた70年代には炭素や窒素の地球表層での循環とそれを支配している生物プロセスの研究はまだ基礎科学の色彩が強かった。しかし、80年代になって地球温暖化が注目されるようになると、炭素・窒素循環に係わるフラックスの正確な見積もり、その制御機構の解明とシミュレーションモデルによる再現が次第に地球環

境問題として大きく取り上げられるようになった。IGBPのような大型の地球環境変動研究の国際プログラムが、海洋を含む地球表層での炭素循環の解析を1つの大きな目標として動き始めた。海洋での炭素循環のプログラムであるJGOF Sの発足時の科学執行委員会(SSC)に入り、さらにこれらの地球環境プログラムを統括するIGBPの委員会に90年代になってから参加するようになってから、日本における研究の進め方とアメリカ、ヨーロッパでのやり方かなりの違いがあることが知らされた。

研究者は通常学会に所属するが、日本の場合所属する学会は大学の時の出身の専攻によって決まっていることが多い。従って地球環境研究のような新しい研究分野は研究者が多くの学会・研究会に分散してしまい、その結果として似たような分野で研究していても情報交換が無く海外のシンポジウムなどで始めて知り合うこともある。一方、研究者の流動性の高いアメリカなどでは、情報の流通が極めて早い。このような違いからはじめは国際的な組織の中で、日本の地球環境分野の全体像を捉えて発言することが難しかった。日本からのまとまったプロジェクトの提案や情報発信も同様であった。最近では、研究費の相互乗り入れも進み共同研究に対する研究者の理解もあって事態はかなり改善され、日本発のプロジェクトも多く提案されるようになって来た。今ではわが国においても地球環境の研究を支える大きな柱である生物地球化学あるいは生物地球化学的な解析と言う表題は、他のフィールド科学の研究者も多用されるようになり、この分野は大きく進展している。

国際組織とのギャップから国内での風通しの良い研究環境をと言っているうちに、第二期の科学技術基本計画

をまとめる総合科学技術会議の環境分野に関係することになった。また、それ以来、地球温暖化を中心とした環境科学・技術のとりまとめや評価に関与する場面も多くなった。この過程において、多くの異分野の研究者や行政担当者を知り合うことが出来、さらに様々なことに興味を持つ習性のある自分を再発見することにもなった。しかし、海洋分野の基礎的研究者として感じる1つの問題は、基礎研究と施策的な応用研究とのバランスである。最近の施策的な大型研究費は、如何に成果が社会に還元出来るかが、評価の重要な視点となっている。その結果、時間がかかる地球システムそのものの理解に必要なプロセス研究は後回しになっているようにも思われる。一方、基礎的な研究を行っている研究者もその成果の出口がどこかについて常に意識していることが必要である。海洋科学のような分野では基礎的な研究と施策的な研究がうまく連携することで、より大きな成果が挙げられ、外にもそれが見えやすいからである。

大学の研究所の良いところは自分の考えに従って、自分が組みたいと思った研究者と共同して研究を進めることが出来る点であると思う。私はこの利点をこれまで国内でも国外でも充分活用させて貰ったことを感謝している。しかし、国立大学が法人化され各大学が様々な道を模索しているこれからは、大学附置の研究所も教育への加重は増えてくることが充分予想される。良い研究者は必ずしも良い教育者ではないと言う現実もあるので、研究と教育のバランスは難しい。しかし、優れた研究を通じて良い学生を育てて行くという大学附置の研究所の利点が維持できるように、これからもがんばって頂きたいと願っている。

海洋学を志した頃の思い出など

海洋生態系動態部門底生生物分野 教授 太田 秀

私が海洋研の海洋生物生態部門（1970.04.17設置）に新任助手として着任したのは1972年春であった。部門創設時、教授は山形大学理学部から配置換えて着任した山本護太郎先生（故人）、助教授は海洋研助手から東大総合研究資料館助教授（現東大総合研究博物館）を経由して1972年02月に着任した堀越増興先生（故人）、向井宏助手（1971年08月着任；現北大釧路臨海実験所教授）、技官に相生敬子・長谷山則夫両氏、技術補佐員に岩城嬢という顔ぶれであった。東大理学部生物学科を卒えて理学系大学院動物学専門課程に在学し、陸生ヤドカリ類の視覚について実験行動学・生理学的研究を行っていた私が、ヤドカリ類の選択する巻貝類の種同定の指導を総合研究資料館の堀越先生にお願いし、また自前の双眼実体顕微鏡購入資金ほしさに堀越先生のマクロベントスのソーティングや、阿部宗明専任講師・富永助手の日本魚類学会誌・日本水産学会誌の校正アルバイトをしたのが私と海洋研とを結びつける一つの縁となった。当時同級の友人であった佐藤寅夫氏とともに日本復帰前の沖縄本島や八重山諸島にナキオカヤドカリやヤシガニの生態観察と珊瑚礁魚類採集に出かけたり、土日には毎週のように三崎臨海実験所に出かけ、スノーケリングやスキューバダイビングで過ごしていた。また、重井陸夫氏（当時東大三崎臨海実験所助手；元京都工織大学教授）、井田斉氏（当時東大総合研究資料館助手；元北里大学教授）、土屋禎三氏（当時東大理学部動物学教室助手；元神戸大学理学部教授）、山口正士氏（元琉大海洋学科教授）、雨宮昭南氏（元東大新領域創成科学教授）らの諸先輩とともに伊豆半島、房総半島、伊豆諸島に出かけ、お茶大の臨海実験所候補地の選定基礎調査や、海洋生物相調査に興味と実益を兼ねて参加していた。また、海洋研海洋生理部門の平野哲也先生（当時助手）が伊豆諸島海域に部門初の淡青丸航海を組んだ際に、研究補助学生として雇われ、実質アルバイト乗船もした。この際、小生のみが荒天にもかかわらず船酔いをしないことに気付いた。川口弘一氏（当時新任の助手）が激しい船酔いに悩まされながら作業をすることに驚き、平野先生が万一の事故に備えて辞表を胸に仁王立ちしていたことが懐かしく思い出される。

そもそも小生は四周を海に囲まれた佐渡島出身であ

り、日本海と祖母の実家である酒造会社の酒樽で産湯を浴び、小学生時代の夏休みと冬休みはすべて叔母の嫁ぎ先である相川町二見や達者（尖閣湾；新潟大学臨海実験所所在地）という景勝地の荒磯で過ごし、定置網の揚網や鴨・雉獵に明け暮れた。何も過去を美化しているのではない。実は物がなかった時代であり、人付き合いが苦手だったのである。片田舎では進学や受験などという意識は皆無であり、また、学校の授業から期待するものはほとんどなかった。暇をもてあまし、兄姉の教科書や参考書、学校図書館の蔵書を読み尽くし、町に残存していた鍛冶屋、漆塗師、京染師の仕事、はては芸者の練習までを日がな一日眺めていたり、ブリキ屋、竹細工屋、指物師や大工、自転車屋で職人技を見習っていた。そのうち、叔父たちが譲ってくれたカメラや顕微鏡、そして友人の兄の天体望遠鏡趣味と父の天文趣味が今の私を決定づけてしまったらしい。

しかし、理学部生物学科の学生となり、三崎の臨海実習でびっくりした。それは、太平洋岸では一日の潮位が「1, 2 m上下」することであった。日本海はほとんど一日の潮位差がなく、せいぜい遠浅の砂浜の汀が「1, 2 m前後」するにすぎない。大袈裟に言えば井の中の蛙の眼から鱗が落ちた、いや、震撼した。海にすむ生物への趣味と、星座と神話の天文趣味が核融合し、地球という惑星と海洋を意識しだした。上の二つを契機として、生理学を志していた大学院学生の身でありながら、海洋研への助手としての招きがあったとき、躊躇はなかった。

しかし、1972年の春に着任し、いきなり5月に出港する丸茂隆三教授が世話する白鳳丸KH-72-1の75日間東南アジア航海のベントス班の番頭を勤める洗礼を受けた。深海トロール、SM採泥器やグラビティコアラによる採泥、深海カメラによる海底撮影を仰せつかった。堀越先生の口頭のみによる希望と指示を受け、現場の神様たる当時の中井俊介・蓮本浩志・乙部弘隆観測機器室技官、および大学院生であった寺崎誠氏（テラさん；現海洋研所長）の指導と助言のみが頼りであった。自分たちの観測点に到達するまでは、割当ワッチでバンドン採水やMTDなどの甲板作業と研究室での溶存酸素滴定や塩検などのルーチン分析をこなす。大型バンドン採水器の

取り外しと受け取りはテラさんに腰の入れ方を習い、その能率を争えるようになり、MTDについては谷口旭氏（当時北大助手）に元田先生の開発と改良の積み重ねの苦労話を伺った。ときに、ナンセン採水器と転倒温度計による測深補正、六分儀による測位の古典的海洋学の演習を中井さんに指導を受けたが、さすがにタイガー手回計算機ではなく、モノロー電動計算機が実用され始めていた。

測点での作業前夜は徹夜のPDR測深で海底地形を探り、測器の準備では素手でくるくると回ったり締まらないシャックルやスィブルをポイとレッコしてしまう鬼の富岡甲板次長（当時）に甲板作業をしごかれ、テーパードワイヤー仕様でジャジャ馬な旧白鳳丸の1番ウィンチをよいとまけてだまし、ウィンチに雑索をかけて採泥器の着底をセンシングしたり、ウィンチ張力計でトロールのアタリをあだこうだと論議したのも今では昔語りとなった。トロールサンプルのソーティングは今島実氏（元国立科学博物館）、岡村収氏（元高知大学教授）、蒲生重雄氏（元横浜国立大学教授）らに教わったが、これら3氏はアルコールが入らないと船上での仕事や研究ができない強の者であったが、小生にはさらに標本写真撮影が残されていたので、おつきあいはできなかった。いや、小生は前述したように幼児時代に既にアルコールは卒業していた。当時の最新式海洋観測はピンガー装着の深海カメラで教わった。中井・蓮本・乙部氏らの後見でセレベス海、スル海の5000m級の最深部での撮影に成功して有頂天になった。他の研究者の睡眠中はフィルムの現像と写真の引伸ばしで就眠時間がないことはたいへんつらい。しかし、小生にとってのこの研究処女航海が、電気生理学を通して手慣れてきた電子機器の活用と開発による深海ベントス学の近代化と、深海底を直接ビジュアルに観察することが自分の当面の使命であることを悟るよい機会となった。

しかし、部門創設費で購入してあった深海カメラがたったの2年で使用不能となった。2千万円超の新規機器購入は助手の手に負えるものではない。絶望の淵に臨んで小学生時代に眺めた職人たちの魂が私の中に復活した。残った超耐圧容器と予備部品の中の水中補正レンズを生かして、カメラとストロボを自作してステレオ仕様とし、メガベントスの定量評価を可能とすることを目標に据えた。子供時代に満足には果たせなかった本格的な工作の夢を実現するべく、秋葉原通いで電子回路を組み立て、金工室で構造部品製作の格闘が始まった。当時離職直前の金工室藤野技官から旋盤とフライス盤使用の手ほどきを受け、光学機器メーカー、電子部品メーカー、ストロボ管製作所、小型ギアードモーター製作所の技術者

を訪ねては適応部品を探り当てた。当時、電子回路はアナログ制御からデジタル制御への切り替え時であり、またオペアンプ、IC、発光ダイオードの曙の時代であったが、幸か不幸か小生は5極真空管、3本足トランジスター、論理回路時代を経ているのでアナログ部品とデジタル部品の双方を組み合わせ、原理を理解しつつ新規設計ができる世代である。今のようにIC化されたブラックボックスや既製品を扱うのではない楽しみが駆動力となった。独身貴族の利を生かし、時間と給料の大部分を流し込むことができた。

1年かけて自作した超深海用水中ステレオカメラは、徹夜明けの淡青丸KT-74-14駿河湾研究航海から使用できるようになった。航空写真測量の原理で撮影面積と被写体のサイズ決めが可能となり、メガベントスの定量化のめどが立った。しかし、またまた回路の焼損事故に見舞われたカメラを改良し、本格稼働が実現したのは大森信氏（当時ブランクトン部門助手；元水産大学教授）とのKT-75-14駿河湾サクラエビ調査と、連続したKT-75-15駿河湾ベントス調査であった。海洋学の処女論文はサクラエビの日周垂直移動の直接証明と昼間における海底直上への蝸集の定量報告となった。

その後カメラー海底間のモニター装置の改良と撮影技法の熟練を経て海底撮影の鬼と化した。なんとカメラ画像は生物の生活と海底をありのままに伺わせながら虚像に過ぎないことに改めて気付かされた。多様な生物種の写真を同定するには実標本採集の裏付けが必要であることからトロール採集と標本同定、底層流の流向流速の実測が科せられた。当時、深海トロールは軟体動物採集を目指し、ドレッジ的な曳網を主張する上司や技官と折り合いがつけがたく、また、標本類は共同研究として乗り合った諸研究機関の分類研究者に流れてしまう悩みと闘いながらの作業であった。まず、ORE型深海トロールの新規設計と曳網法を確立することで採集能率を一桁上げた。そして、できる限り多くの分類群の生物種を自ら同定する訓練を重ね、採集された標本の計測と重量測定で、画像から生物湿重量を求める基礎データを集積し、各種生物の生息深度分帯や生物地理学的分布データベース構築ルーチンが固まった。これらの作業の総合から垂直に見下ろした画像で、魚種を同定する特技（図鑑類はほとんど横から眺めて図示されている！）や、二次元の映像から生物現存量や流向流速を読み取るという飛躍が可能となった。

この自分の専門とする研究の開始の合間にも、山本護太郎教授の磐梯五色沼調査、堀越助教授の石垣島川平湾の珊瑚礁海域生態調査、パラオ珊瑚礁海域海外学術生態調査に4・5年間参加し、多様な環境を経験する貴重な

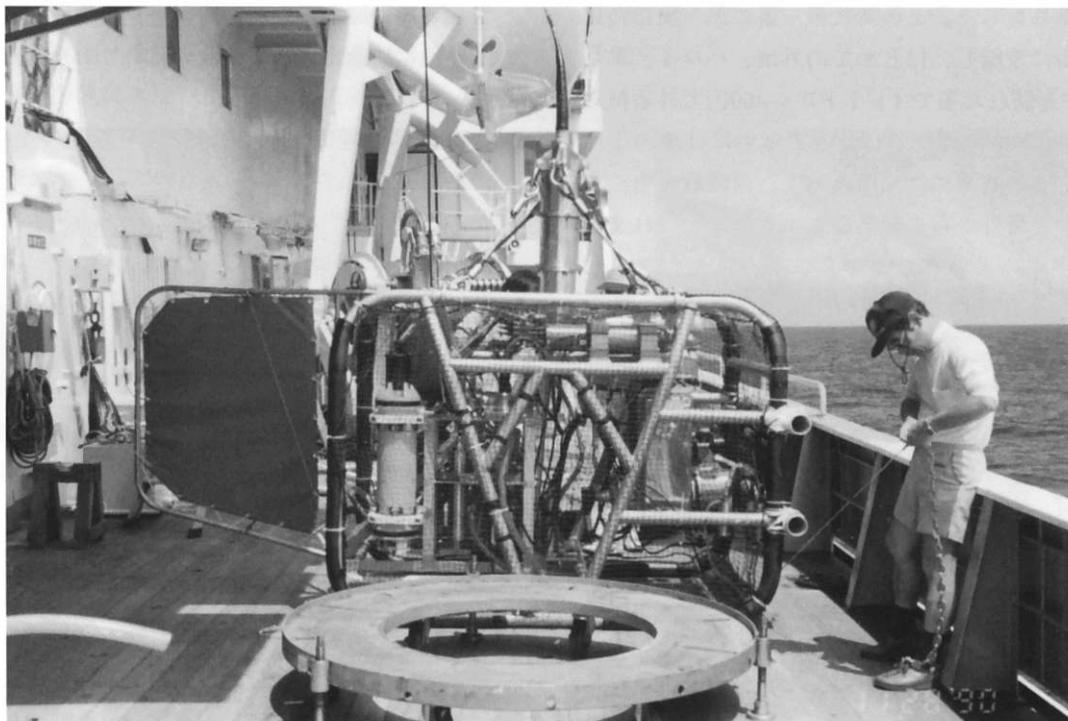
機会を得たが、堀越助教授が教授に昇任し、日本海区水研から沖山宗雄先生が助教授として着任され、すぐれない健康にもかかわらず底生魚の写真による同定に献身的な協力と指導で、やっと本業を軌道に乗った。

1976年末に出発する85日間の白鳳丸KH-76-05次航海の途次、インド洋中央赤道海域の水深5千mで立派な突起を備えたエボシナマコの撮影と採集が長男出生のサインとなった。乗船研究者の祝福の寄せ書きが添えられたワインラベルは、お宝としていまなお保存している。

1984年から一般に共同研究が開放された「しんかい2000」の搭乗を開始できたことで、長年海底写真とトロールで挑戦してきた海底への直接探訪の夢が実現した。1987年にはアメリカの有人潜水艇アルビン号による西太平洋域初のマリアナ背弧海盆中央部の熱水噴出孔生物群集発見に参画でき、国内では相模湾初島沖のシロウリガイ群集の発見、日仏KAIKO計画でノチール号による日本海溝での沈み込み帯の冷湧水性化学合成生態系の発見に参加できたことは在職中盤のハイライトとなり、その後しばらくは各国の有人潜水艇や渡辺正晴技術専門官とともに新規に開発した深海曳航プラットフォーム DESMOSでマヌス海盆、南西諸島海盆、北フィジー海

盆、マリアナ海盆南部等の西南太平洋背弧海盆熱水噴出孔生物群集の探索や発見を継続した。創成期のJAMSTECのスタッフと火の玉と化して行った共同作業は忘れられない。さらに白鳳丸KH-93-3次航海で玉木賢策・蒲生俊敬・石井輝秋諸氏らとともに挑戦したインド洋中央海嶺調査に端を発し、世紀の変わり目の2000年に遂に無人潜水艇Kaikoで実現したインド洋中央海嶺熱水噴出孔生物群集の発見が深海「探検」の掉尾を飾った。その後はむしろ潜水艇調査では結果的に手薄となった一般の大洋底や海溝域生物調査のデータベース化に残る努力を傾注しでしたが、日暮れて道遠しの感にさいなまれている。

助教授・教授時代にそれなりの数の国内外の院生や助手・助教授に支えられながら、いまだ果たし得ないライフワークの深海生物データベースの集積を許してもらえたのは感謝に堪えない。太陽に背を向けて奈落とつきあう35年間であったが、妻が鼓吹してくれた美術と詩、そして草木やペットへの愛が心の支えとなっていた。そして、大学法人化後のせせこましき時代への移行期に、窒息を免れて定年退職を迎えられたことは幸せというべきであろうか。



白鳳丸KH-90-3次マヌス背弧海盆調査航海で深海曳航式プラットフォーム DESMOSを準備中の筆者と渡辺正晴氏。

船の思い出

国際沿岸海洋研究センター 教授 寺崎 誠

戦時中、海軍技術将校をしていた父の影響で、幼少の頃より海に興味をもち、いつかは船に乗って七つの海に行きたいという夢もありましたので、1966年4月に本郷の農学部水産学科に進学してから研究室を決める時なるべく乗船できる水産海洋学講座にしました。学科の3年のアジ・サバ調査の実習の時にはじめて三崎の漁船に乗船し、三崎から大島の波浮港まで行きましたが、この時はじめて船酔いを体験しました。この実習の後、同学年の松田治氏（海洋微生物部門：広島大）と一緒に神奈川県水試の江ノ島丸に1ヶ月乗船しサンマの調査を手伝い、船にもだいたい自信をもちました。4年では米国ワシントン大学から帰国したばかりの小牧勇蔵先生について卒論で『黒潮域の動物プランクトンの分布生態』を研究し、自分の試料を新造の白鳳丸で採集するという幸運にも恵まれました。

修士から海洋研究所プランクトン部門に進学し、丸茂隆三先生のご指導で『太平洋における毛顎類の生態学的研究』に従事しました。この時代の一番の思い出は白鳳丸の長期航海に乗船し、はじめての外地、ハワイ、タヒチ、西サモアを訪れた事です。1ドル=360円で外貨持ち出し制限が500ドルの時代でしたので学生には夢のような話でした。この航海には元田茂先生、西澤敏先生、小倉紀雄先生など所外からも著名な先生方が参加されたので航海中にいろいろなことを教えていただきました。MTDネットが試作されたのもこの航海でした。院生の最年長は博士3年の高橋正征さん（高知大）で、大変に博学で当時から余裕がある方だと感銘を受けました。またこの航海を縁に海洋生化学部門の藤田善彦先生には毛顎類に含まれるカロテノイド色素の分析をご指導いただき、同部門の和田英太郎先生とは後に安定同位体の仕事をご一緒することになりました。小生の大学院時代はまだ海洋研究所も研究者が少なかったので淡青丸・白鳳丸にはプランクトン採集のため頻繁に乗船し、1973年3月の学位論文提出時には乗船日数は400日を超えておりました。

大学院修了後は運良くタイでエビ養殖開発のプロジェクトの立上げに参加することができ、海外技術協力事業団（OTCA: JICAの前身）の派遣で農業協同組合省水産局に勤務することになりました。このプロジェクトの背

景は、1970年代のタイはドイツから取入れた効率の良いエビトロール漁法でエビを穫り過ぎたため資源が枯渇し、車エビの養殖に成功している日本に養殖技術の導入を要請したものです。種苗生産に用いる親エビの捕獲のため水産局の漁業調査船にも乗船しましたが、航海中に朝、昼、晩と3回エビ料理が出てくるのでいささか食傷ぎみになりました。

1977年の春に任期満了で帰国した後は、次に地中海に面したチュニジアの海洋研究所で仕事をすることを頭の中に描いておりましたところ、5月頃、当時、新設の大槌臨海研究センター長を兼務されていた恩師の丸茂所長から助手に応募するよう話があり、10月1日付けで助手に採用されました。大槌ではプランクトン調査、湾の定期観測などで毎日のように舟艇に乗船し、自分でも操船できるようにと小型船舶操縦士の資格も修得しました。1982年に入ると白鳳丸の舟艇を改造した「弥生」の代船建造の話が持ち上がり、川村忠船長、藤井繁幸技官とともに各地の臨海実験所の舟艇を見学するとともに新橋にある漁船協会事務所での設計打合せのため頻繁に上京しました。

弥生代船竣工の直前の1983年4月にプランクトン部門の助教授として10年振りに中野キャンパスに戻りました。当時の部門の体制は根本敬久教授のもと助手の西田周平さん、古谷研さん（東大農学生命研究科）、技官の福井弘子さん、永沢祥子さん、石丸君枝さん、大学院には岩崎望さん（高知大）を筆頭に菊池知彦（横浜国大）、津田敦、宮正樹（千葉県中央博）、保坂信仁（在仏）、戸田龍樹（創価大）、韓明洙（韓国：漢陽大）、徐海苙（韓国：全南大）、ワグディ・ケルゲス（エジプト国立海洋研究所）、の9名が在学し活気に溢れており、皆、夜遅くまで研究に励んでいました。この年の夏からは11月からはじまる根本先生を主席とする白鳳丸南極海航海（BIOMASS）の準備で多忙な日を送っておりましたが、豪州のフリーマントル経由で南極海に入りはじめて冰山を見た時の感激は忘れられないものでした。その後1994年、2001年にも主席研究員として南極海を訪れる機会がありましたが、KH-83-4航海の印象が一番強烈でした。幸運にも一番良い氷（約10万年前）が最後の南極海で採れました。

1987年度予算で白鳳丸代船建造が認められると建造委員会の幹事になり居住区・船内環境およびRI実験室を担当することになり、設計打合せなどで三菱重工下関造船所、長崎研究所によく足を運びました。1989年春の竣工を前に当時所長をしていた根本先生が『処女航海でどこに行こうか?』と尋ねられたので、小生は即座に『世界周航を実現しましょう』と答え、たいふ時が経ってから1989年10月から世界一周航海を行うことが正式に決定しました。小生の生涯の思い出に残る海洋研究所始まって以来の大航海を前に、この航海に乗船が決まった乗組員の方々は小躍りして喜んでおりましたが、淡青丸の方は残念そうでした。10月27日の出港を前に航海幹事長として観測機器室の運本浩志さん、乙部弘隆さんに手伝っていただき準備に明け暮れる日々を過ごしました。航跡は東京ーサンディエゴーパナマ運河ーマイアミーリスボンーモナコースエズ運河ーゴアーシンガポールー東京で各レグの主席は平啓介ー寺崎ー寺崎ー根本ー瀬川ー寺崎ー杉本の5名で、寄港地のスクリップス海洋研究所、マイアミ大学、リスボン、モナコ、ゴアのインド国立海洋研究所では盛大な新船お披露目パーティーが開催されました。特にモナコでは元首のレエニエ大公一行が船を見学され、賄い手作りの天婦羅の味を堪能されました。大航海とも縁のあるリスボンでは全員異国での新年を大いに楽しみました。根本先生は病魔をおして所長業の忙しい中スクリップスでのレセプションに出席され、またリスボンーモナコ間に乗船されました。先生はこの航海の後、東大病院分院に入院され夏に他界されました。ま



写真1：モナコ・レエニエ大公の来船
(世界周航、1990年1月)



写真2：白鳳丸南極航海 (1995年1月)

た小生とともにレエニエ大公をお迎えした無機化学部門の野崎義行さんもこの世にいないと思うと感慨深いものがあります。この航海の参加研究者は76名で海洋研究所から全航海乗船したのは運本さん、稲垣正さん、北川庄司さん、研究生の秋本泰さんと小生の5名でした。本当に忘れる事のできない大航海でした。

その後プランクトン部門では杉崎宏哉(中央水研)、エリック・トゥーセン(米国オリンピック大)、安田智英(在米)、豊川雅哉(中央水研)、小林晴美、西川淳、呉奉喆、石垣哲治、吉村美和、海洋科学国際共同研究センターでは三宅裕志、トラビス・ジョンソンの11名の大学院生の指導教官を務め、彼らを連れて白鳳丸、淡青丸によく乗船しました。1994年に入ると理学部附属三崎臨海実験所の森沢正昭所長(海洋研OB)から臨海丸代船の建造に助力してほしい旨の依頼があり勿論、快諾しました。この後、大槌の弥生代船の建造にも参加したので、つくづく船の建造にも縁のある人生であると実感しました。

海洋研究所で過ごした30年間は、大槌、中野を問わずよき師、先輩、同僚、事務職員、院生諸君にも恵まれ本当に充実したものであり、院生、職員の方々と楽しんだサッカー、ソフトボール、水泳、スキーなども楽しい思い出です。16年間務めた東大ボクシング部長を定年で退任するのは後ろ髪をひかれる思いですが、2年前に就任した東京都アマチュアボクシング連盟会長の職務は4月からは益々増えそうで、どうやら小生の第2の人生も忙しそうです。



写真3：船上でのシラ釣り

研究生活を振り返って

海洋底科学部門海洋底テクトニクス分野 助教授 石井輝秋

はじめに

私が自然科学を志したのは、中学生時代にソ連のスプートニク報道に接し、将来月の世界へ行こうと固く決意したことに始まると思う。当初ロケットの研究者になることを考えていたが、或る時ふと糸川英雄博士のようなロケットの研究者本人は月の世界へは行けない、ということに気が付き困惑したことを覚えている。やがて大学で進路を決定する時期になった頃、アポロ計画で持ち帰った月の岩石が、日本にも来るという報道が流れ、これ以外の道は有り得ないと判断、東京大学理学部地質学教室久野久先生の下で、地質・岩石・鉱物学の基礎勉強を開始した。

大学院では鉱物学、岩石学両教室に所属し、久城育夫先生、定永兩一先生の御指導による隕石等の主要構成鉱物である輝石の研究、及び箱根火山の岩石学的研究により博士号を授与された。学振研究員を経て、米国シアトル市ワシントン大学で、NASAの資金による研究員として、念願の月の岩石研究に就くことが出来た。その後久城育夫先生の御紹介で、昭和52年4月に東京大学海洋研究所に職を得、小林和男先生の大洋底構造地質部門で、海洋底岩石の研究に従事する事になった。

研究のまとめ

研究に際して私は天然産一次試料の詳細な観察、特に構成鉱物の解析と岩石学への応用を基本にした、一次データに基づく物質科学的研究を行ってきた。まず天然の観察を整理し、新しい地球科学的解析手段を開発し、それらの知識・手段を用い未知・未詳試料の解析をし、新たな海洋・地球・惑星科学的概念を提出するよう努めてきた。

従来の研究は次の4種に大別できる。(1)造岩鉱物(輝石、クロムスピネル)及び火成岩に関する基礎的研究、(2)海洋底構成岩石を主とする火成岩(陸上火成岩、隕石、月の岩石を含む)の自然史的、岩石学的研究、(3)海洋生物関連硬組織(耳石、サンゴ、Mn-団塊、フォスフォライト)といった生物をも含む物質科学的共同研究、(4)国際深海掘削・海洋観測研究航海・深海潜水調査・海外学術調査等を通しての学際的共同研究。

特に多岐に渡る上記(2)の海洋底火成岩については、物

質科学とテクトニクスのトータルな解明を目指してきた。即ち海洋底火成活動はプレートの発散の場である海嶺域、収斂の場である島弧海溝域(そして両者の特性の複合域ともいえる縁海域)、更に両者とは独立のプレート内域(巨大火成活動域=LIPS, ホットスポット、コールドスポット、プチスポット等)の活動に大別できる。上記三種の活動域での火成活動の構成物とその変遷過程の解明をめざし基礎研究に臨んできた。研究に用いた海底試料は、自ら参加した国際深海掘削計画のボーリングコア、ドレッジ試料、有人潜水艇の採取試料等多岐に渡る試料を活用してきた。

以下に研究の概略を示す。

(1a)ピジョン輝石の安定領域を見積もり、信頼度の高い三種の輝石地質温度計を提出し、それを応用して

(1b)島弧火山岩の主要構成要素である、ソレアイト及びカルクアルカリ質マグマは、共にある程度H₂O(約1~2wt%)を含んだ島弧性ソレアイト質本源源マグマの分化物であり、その差は前者がH₂Oを系(=マグマ溜り)外に放出しながら分化し、後者が水を放出せずに分化した点にあるという成因モデルを提出した。

(1c)斑晶鉱物の示すマグマ溜り中の晶出経路と各溶岩中の晶出経路の差は、前者はマグマ溜り中の結晶分化による晶出経路を、後者はマグマ噴出時の脱ガス作用に伴う固相線の上昇による急速な、そしてほぼ等温的な結晶作用であることを示した。この認識は火山岩の斑晶と石基の鉱物相の解析をする上で重要な新しい概念である。

(2a)岩石、堆積物、生物硬試料等を含む、ドレッジ試料を中心とした海底試料の採集、キューレイティングおよび研究に従事してきた。地の利のある、フィリピン海のみならず、海嶺系、島弧-海溝系、海台・ホットスポット系を含む全世界の海底を研究対象としている。

(2b)伊豆-小笠原-マリアナ弧前弧域にはinsitu ophiolite(=プロト・オフィオライト)ともいえる蛇紋岩からなる多数の海山が存在する。これらを構成する蛇紋岩は部分溶融の程度が約30%と高い特異なマンタルカンラン岩であることを示した。ODPLeg125での研究から、これらは島弧初期火成活動の際の、マンタルグアイアピル由来の溶け残りカンラン岩が、約40Ma後に蛇紋岩グアイアピルとして地殻中を上昇し、前弧域の海洋地殻を

押し上げて、海底に露出したものであるという作業仮説を提出した。更に蛇紋岩海山はキプロスのトロードス・オフィオライトの、そしてトンガ前弧域はオマーン・オフィオライトの、それぞれモダンアナログであるという作業仮説を提出し検証中である。

(1c) IPOD Leg59での九州パラオ及び西マリアナ海嶺の掘削岩石の研究で、島弧としての発達が未熟な比較的地殻の薄い西マリアナ海嶺で、低温のカルクアルカリ岩の存在を確認した。

(2d) 自前で採集(インド洋、アデン湾)した岩石にODP (Leg203, Leg 200)の岩石を加えMORBの岩石学的基础研究も行ってきた。(2e) 近年は海洋プレート深部構成岩石の物質科学的・岩石学的探索に力を入れている。つまり、海洋域の地球深部岩石研究には深海掘削コアに加え、海洋底に露出する(例えばマリアナ海溝南部陸側斜面)斑レイ岩やマンタルカンラン岩等の地球深部由来岩石の研究は、大変重要であるにも拘らず、研究が手薄であることを認識したからである。

(3a) 日本ウナギの耳石のEPMA解析、サンゴ骨格の面分析やフォスフォライトの成因に関する共同研究にも携わってきた。そしてウナギの成長史の解明、サンゴの成長史と古水温の関係を明らかにする研究のお手伝いもした。

(4a) 私は今まで室内での研究は勿論のこと、海洋研究所という、

(4b) 全国共同利用研究所に在席したために、その制度の下にある外来研究員制度(因みに、外来研究員総件数の2~3割にあたる10-15件を毎年お世話してきた)等を活用して持ち得た、内外の多くの研究者との交流、(4c) 国内船はもちろんIPOD (Leg59)、ODP (Leg125、Leg203)、Melville、Moana Wave、Atlantis II等の、外国船による長期研究航海、有人潜水艇(アルビン、ノチール、しんかい6500、しんかい2000)による深海潜航調査研究、

(4d) 長期出張による海外での共同研究、つまりシアトル・ワシントン大学・地質学教室で約1年の月の岩石の研究、カナダ・ダルハウジー大学・地質学教室で約2年の海洋底岩石特にマンタルカンラン岩の研究、米国のスミソニアン研究所で約1年の島弧火山岩の研究、

(4e) 海外学術調査研究(杉村新、米倉伸之を代表とする南太平洋における海面変動=HIPAC)等にも積極的に取り組んできた。これらの機会を通じ、地質学・地球科学・生物学・海洋底科学・惑星科学諸分野での見聞を広めることができたし、専門分野の同異にかかわらず、多くの研究者と議論し、又共同調査研究を経験できた。

このような我がまますを御許し下さった皆様の寛大さに、改めて深く感謝申し上げる。

これからの人々への望み

海洋科学を含む地球科学は、重要さ、科学的ロマンの豊富さの割には、日本では欧米等に比べ馴染が薄く、研究者の層も限られている。大学に所属する海洋の基礎的研究機関としては、唯一東京大学海洋研究所が存在するだけであり、しかも、私は唯一の海洋底物質科学の専従研究者として岩石、堆積物、生物硬試料等を含む海底試料のドレッジによる採集(採集装置の保守開発も含む)、キューレティング、解析研究を行うと共に、岩石切断・薄片室、X線分析室等の陸上研究施設の、整備、機器開発、機能向上、保守及び、共同利用研究(外来研究員を含む)に努めてきた。一方米国には、より大規模な海洋研究所が10カ所以上もあり、海洋底物質科学の専従研究者、技術者も各々数名以上有する。このことから理解できるように、海洋底科学分野では日米の差は大きく、特に海洋の物質科学としての面は更にその傾向が著しく、今後特にこの分野での研究・教育の充実が早急に図られることを望む。

日本の陸上地質の70%以上は、前弧域を含む海洋底由来の物質から構成されていると言っても、過言ではない。陸上の地質は過去の地質過程の集積、つまり現在の海洋底地質過程の集積として理解できる。陸上地質の理解にも、海底地質・岩石の研究は不可欠であるという認識が重要である。この観点から陸上研究者の関心を、海洋底研究に向けさせる事が可能であると考えられる。しかし現状では、海洋底物質研究を主とする研究者、学生の少ないことから、この分野の重要性が十分に理解されているとは言い難い。そして、その原因は海底試料へのアプローチの困難さに求められるのかもしれない。

しかしこの問題も以下の観点から打開できるものと考えられる。既に採集済の試料の活用。白鳳丸・淡青丸(学部生の乗船が重要)のみならず、JAMSTEC(学部学生乗船可)をはじめとする公的機関船舶利用公募に対する、応募研究による活用。外国船舶の共同研究による活用。国際深海掘削(DSDP, ODP) 試料の活用、等が考えられる。

特にIPOD、ODPで採集された岩石試料は乗船研究員あたり100個を限度として配分されるのみであり、残りの大半は(特に米国の研究者からは)殆んど顧みられることもなく保存されていて、極言すれば過去30年間に渡り蓄積された国際深海掘削の岩石試料の多くは、ほぼ休眠状態に在ると言っても過言ではない。(しかし、幸いにも、岩石試料の保存状態は非常に良好である。)国際深海

掘削計画最大の科学遺産として誰もが認める、ボーリング・コアの有用活用についての議論は、ODPの中で積極的に行われていたとは言いがたい。更に、現在の分析レベルからすれば全ての岩石・鉱物の再分析、そしてそれに基づく再考察が不可欠である。私自身はスクリップス海洋研究所、テキサスA&M大学、ラモント地質研究所、ブレイメン大学(独)のコア保存庫を各々複数回訪れ(ラモントは1回)良質な試料を採集、共同研究のみならず、海洋研内外の修士・博士論文研究に供する等、有効活用を図ってきた。

DSDP、IPOD、ODPの保存コアを、日本の多くの大学で修論又は卒論レベルから教育・研究に活用することにより、日本における地球掘削科学、海洋底科学研究の底辺を質量ともに拡大することが可能となり、21世紀の海洋底科学の発展が期待される。近い将来には、ODP保存コアの内、西太平洋およびインド洋の約150km分のコアが高知大学のコアセンターに移管される予定とのことであるが、それを待つことなく、一刻も早く取り掛からねばならない。特にOD21は地球科学に携わる多くの研究者の協力無くしては成立しえない大プロジェクトであるため、地球科学に興味を持ち参加に意欲のある若手研究者・学生を含めた研究者集団の育成・拡大が急務であり、共同利用研究所である東京大学海洋研究所には、特にそのような若手研究者・学生集団を育成することが望まれる。

海洋底研究の機会は飛躍的に増加したとはいえ、良質な海洋底地質試料へのアプローチは、未だ容易ではない。一方、近年の日本における宇宙科学の飛躍的発展は、南極隕石という良質で豊富な研究試料の入手及び、分析機器の飛躍的発展によりもたらされたと言っても、過言

ではないであろう。このことは、実に示唆に富んでおり、海洋底研究においても見習うべきだと思われる。特に筆者は、東京大学海洋研究所所有試料だけの活用には限界を感じていたことに加え、ODPの科学立案評価パネル(ISSEP)及び科学委員会(SCICOM)等の委員として、国際深海掘削試料保管庫を訪れ見聞した際に、実に「もったいない」と思い、上記科学遺産の活用を強く考えるに至った。

更に、日本周辺の海底には、特にフィリピン海に見られる様に海底火山活動、熱冷湧水活動、古島弧、縁海、海山-海洋島、蛇紋岩質前弧海山、多岐に渡るマンツルカンラン岩の産出等々、欧米の研究者にとっては羨望の的である変化に富んだ未精査の研究対象が山積している。特に南部マリアナ海溝陸側斜面には縁海を伴う島弧-海溝系の地殻の上部(堆積層と火山岩)から下部(深成岩)、更に上部マンツル至る地質断面の世界で唯一の大規模な露出があり、地球科学の総合調査研究が待たれている。これらを対象とし、OD21掘削候補地点をも見据えた共同研究の組織化も可能であろうし、若い海洋底科学研究者の多岐に渡る活躍が望まれる。

おわりに

私は写真撮影を趣味としていつもカメラを持ち歩き、あまり遠慮することもなく皆様を撮影させて頂いて参りました。多くの方々に快く被写体をお引き受け頂いたことに、改めて感謝申し上げます。私自身が被写体になることはあまり多くありませんでしたが、最近塚本勝巳、堤眞両氏から頂いた写真は私のお気に入りです。紙面に余裕があれば、掲載頂けると幸いです。

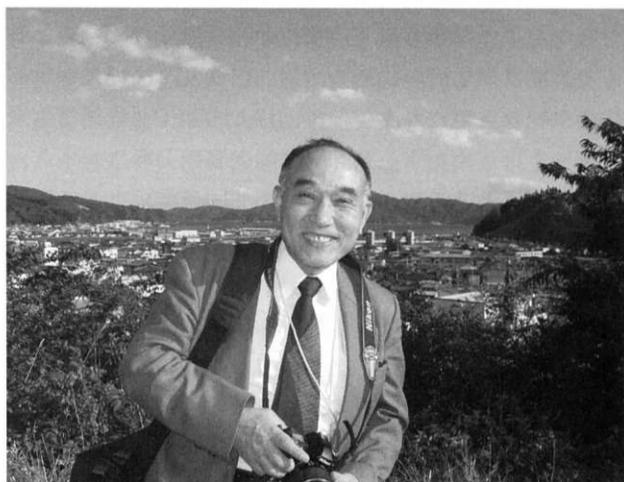


写真1：大槌にて、塚本勝巳氏撮影



写真2：海洋研にて、堤眞氏撮影

白鳳丸・淡青丸研究成果発表会「海學問」を終えて

「海學問」プログラム委員会世話人

海洋底科学部門海洋底地質学分野 教授 徳山 英一

研究船白鳳丸及び淡青丸は平成16年4月に東京大学海洋研究所から海洋研究開発機構に移管されました。移管後は東京大学海洋研究所が研究船航海計画策定、観測支援等の研究に係わる諸事項の運営は全国共同利用体制のもと東京大学海洋研究所が担当し、一方海洋研究開発機構は研究船の運航を担当することになりました。この新しい体制に移行して2カ年が経過し研究成果が次々と発表されております。このような状況を踏まえ、研究者間でさらなる議論を進めるのみならず、広く世間に成果を公表し評価していただく目的で、研究面での成果に責務を負う東京大学海洋研究所が主催する研究成果発表会を開催することが、学術研究船運営委員会で提案されました。これを受け、寺崎誠学術研究船運営委員会委員長は9月8日(金)、9月9日(土)に日本科学未来館(東京都江東区青梅)において、研究成果発表会を開催することを決定し、研究発表会の企画を学術研究船運航部会に委任し、世話人は部会長の徳山英一が担当することになりました。

そこで、部会委員でプログラム委員会を立ち上げ、発表会の企画方針について議論しました。議論の中で各関連学会等が主催する海関係のシンポジウムが昨今では様々企画されていることから、対象となる参加者を想定し、特色の有るシンポジウムにするため一工夫が必要であるとの意見が出され、下記の方針でプログラムを作成することになりました。1)学際的な研究題目3種類ほど企画し、十分な議論の時間を確保する、2)草の根サイエンスのセッション(原則公募)を設ける、3)口頭発表・ポスター発表を併用する、4)研究成果発表会の名称を「海學問」とする、5)それぞれのセッションに担当コンピーナーを運航部会委員から選出し、コンピーナーが特徴の有るプログラムを企画する。

その結果、下記のプログラムが決まりました。

セッション1(口頭発表):国際大型プロジェクトと連携した研究航海の成果(招待:5件)

セッション2(口頭発表):亜熱帯循環系における生態系変動(招待:5件)

セッション3(口頭発表):最近の研究成果特集(公募:10件)

セッション4(口頭発表):新しい観測手法の開発(招待:5件)

ポスターセッション(公募:30件)

発表のほとんどは淡青丸・白鳳丸を中核とした海洋観測結果を基盤とした最新の研究成果であり、あらためて我が国の海洋研究における両船の位置付けの重さを示すも

のとなりました。また、多岐の分野にまたがる海洋学を横断的に議論する場が今回の発表会で僅かではあるが提供できたものと考えます。

一方で、会の開催趣旨を広く利用者に徹底するに至らなかったこと、発表者への参加旅費は原則不支給であることの情報伝達が徹底していなかったこと、発表時間の厳守および議論の時間が十分に確保できなかったこと、口頭発表かポスター発表かの選択をプログラム委員会が決定したこと、など反省点も多々ありました。今後の課題と考えます。

また、「淡青丸代船への取り組み」と銘打った公開討論会を2日目の午後に企画しました。基調報告のあと活発な議論が交わされ、海域と陸域を結ぶ沿岸域を対象とする先端海洋観測船が喫緊に必要なことで合意され、建造実現に向けて益々の努力をすることが確認されました。

本シンポジウムには、全国共同利用研究船評価委員会(外部委員7名から構成)に御出席いただきました。その理由は、実際に研究発表をお聞き頂き研究成果の評価をしていただくのみならず、淡青丸代船についてもその重要性を理解していただくことでした。評価の総評を見る限り、上記の目的がある程度満足されたと考えます。

会には2日で延べ307名の参加者を数え、また公募には予想を上回る総計40件の応募を頂きました。また、プログラム委員会と連携しロジスティックスを担当する実行委員会に海洋研事務部および観測研究企画室が参加し、発表会および懇親会(8日17時45分~19時45分:日本科学未来館7Fのレストラン)を円滑に運営することが出来ました。プログラム委員会を代表し関係各位に感謝致します。さらに、「海學問」に協賛頂いた海洋研究開発機構、機器展示に参加頂いた各社に感謝致します。



●国際シンポジウム

第2回日韓海洋科学シンポジウム

海洋研究連携分野「生物圏環境学」 教授 木村伸吾

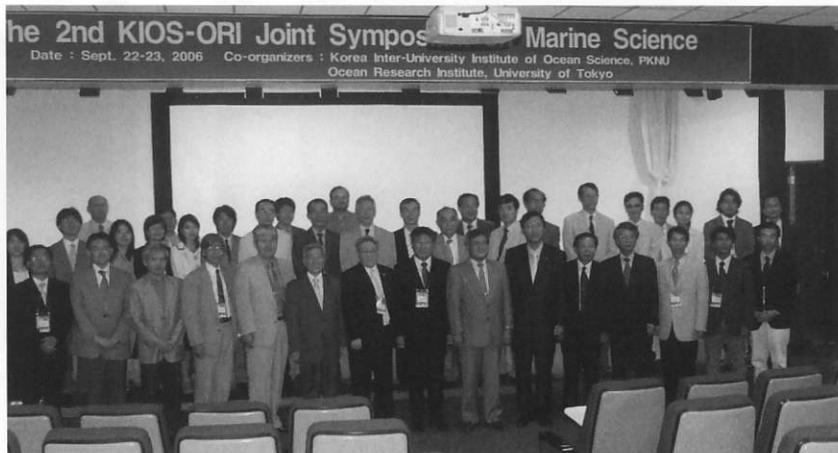
平成18年9月22日～23日、釜慶国立大学校海洋科学共同研究所(KIOS)の講堂を会場として第2回日韓海洋科学シンポジウム(The 2nd KIOS-ORI Joint Symposium on Marine Science)が開催されました。このシンポジウムは、東京大学海洋研究所と釜慶国立大学校海洋科学共同研究所との間における学術交流協定に基づくシンポジウムであり、第1回は平成14年8月に釜慶国立大学校の関係者を海洋研究所に招聘し開催されたことから、今回は本所関係者が同校を訪問してシンポジウムを開催する運びになったものです。第2回のシンポジウム開催に先だて、寺崎誠所長、塚本勝巳国際交流委員長、私が出席して、この国際交流協定の更新締結が平成18年2月27日に同校において行われました。

今回のシンポジウムには、日本側からは寺崎所長以下23名が出席し、また韓国側からは50名以上の出席者があり、26件の口頭発表と19件のポスター発表が行われました。協同オーガナイザーとして、KIOSからSeok-Yun Kim教授とGwang Hoon Lee教授が、海洋研究所からは朴進午助教授と私とその任に当たり、近泰子国際交流係長には事務的な対応に尽力して頂きました。シンポジウムのオープニングには、KIOSのHan-Soeb Yang所長と寺崎所長のスピーチがあり、今後も継続した両研究所間の結束が確認されています。それに引き続き、釜慶国立大学校Yun-Soo Mok総長祝辞、韓国農林水産部長官や国会議員のメッセージがあり、韓国側の並々ならぬ熱意を強く感じました。今回の訪問では、空港からの送迎、懇親会、市内・魚市場見学など、釜慶国立大学校上げての歓迎を受け深く感謝した次第です。

シンポジウムの話題は物理・化学・生物・地学・水産

と多岐にわたる研究分野に関わるものでしたが、一堂に会して両国間の共通研究課題を改めて認識できたことは極めて有意義であったといえます。発表された話題は、溶存有機物・無機物の動態、海底湧水、ウナギの回遊、微小プランクトン・バクテリアの分布、ベントスの生態、進化生物学、クロマグロ・イカの生態、資源解析と資源管理、海底堆積物、地形表現手法、海洋気象、表層・深層循環などで、韓国側の発表には朝鮮半島周辺海域を対象とした演題が多く見受けられ、地理的に重なる部分で我々にとっても共通の興味や知見が得られたものと考えます。

今回のシンポジウム開催に当たっては、単なる意見交換、情報交換に終始することなく、それをさらに発展させ、具体的な共同研究を実施するための下地作りに念頭が置かれています。そこで、協同オーガナイザーはこれを議論するための総合討論を最後のセッションとして企画し、座長となったSuam Kim教授とともに具体的な提案を行うこととなりました。その結果、生物、化学、地学、物理の研究分野から淡青丸研究航海公募に応募して、日韓の研究者が協力して研究航海を実施、さらにその研究成果を第3回日韓海洋科学シンポジウムの中で発表しようということで合意がなされました。共同研究実施に向けた各分野のコーディネーターとして、塚本勝巳教授、蒲生俊敬教授、川幡穂高教授、道田豊助教授が対応頂けることとなっており、その一部は早々と2007年度から実施予定となっています。第3回は日本で開催予定であり、柏キャンパスに建設する新しい海洋研究所のお披露目シンポジウムとなることが期待されます。



インド国立海洋研究所との協定が締結される

海洋科学国際共同研究センター 教授 植松 光 夫

近年、インド洋での海洋観測調査に世界各国の研究者の関心が集まっています。これはインド洋の持つ特有の無酸素層の形成や物質循環、水産生物、そして気候変化に対する生態系への対応、大陸プレートの三重点での地質学的な調査など、国際的な対応で取り組むべき課題が次々と提案されつつある現状を反映しています。

この流れの中で、2004-2005年にかけて日本学術振興会客員研究員として海洋研究所に滞在していたインド国立海洋研究所のDileep Kumar博士と塚本勝巳前国際センター長が起案し、本所との学術協定を締結するに至りました。

2006年10月5日、現地時間11時より、インド国立海洋研究所との協定書の調印式が行われました。日本からは、寺崎所長代理として国際センター長である植松と、海洋

研究所協議会の委員をされている名古屋大学才野敏郎教授、海洋研究開発機構の北里洋プログラムディレクターのお二人にも列席していただきました。インド側から協定に係わる主任研究者、事務官が並び、各関係者の見守る中、なごやかに署名が行われました。

双方からの記念品交換後、Shetye所長から、今後は教育についても交流が出来るようにと提案を受けました。東京大学が国際連携交流拠点をインドに持つ計画がある事を披露し、インド洋への白鳳丸航海も計画されている事を紹介しました。今後、共同観測・研究を行うために、二国間交流事業などにも積極的に申請していくことで合意しました。所内の皆様からも積極的な共同研究提案が出されることを期待しています。



JAZZ in ORI

事務部総務課 片桐和子/所長 寺崎 誠

1月の新春邦楽会でスタートした2006年の所内厚生委員会の活動も8月のソフトボール大会に続いて12月4日のジャズコンサートで終了しました。このコンサートのきっかけは2005年の夏に大槌で開催された坂田明トリオによる演奏会でした。演奏会後坂田氏とジャズ喫茶「クイーン」で会食し、翌日は大竹先生と一緒にセンターを案内しました。この時、いつか機会があったら中野でも演奏して下さいと頼んだ記憶があります。この縁でようやく待望のコンサートが坂田明氏（サクソ・クラリネット）、バカボン鈴木氏（ベース）、廣木光一氏（ギター）をお招きして講堂で開催されました。この企画を成功させるため一月前に実行委員会を立ち上げ、ポスター・パンフレットの作成、会場設営、演奏会後の食事準備などにあたりました。会場に入った所員は普段のイメージとはがらりと変わった講堂の飾り付けに度肝を抜かれまし

た。

初めにDVDを使った坂田氏のミジンコについてのトークがあり、専門的な解説の中にもユニークな人生観を交えた洒脱な語り口が参加者の笑いを誘いました。

続いて海洋研の名にふさわしく、海に関わる坂田氏のオリジナル作品を含む「水母～ A good for nothing」、「Ballad for Taco」等7曲が時には歌も交えながら演奏されました。ステージから奏でられる、時にしみじみと心に語りかけ、時に魂を揺さぶるようなサウンドに全員が酔いしれ、充実した時間を共有しました。アンコールのイタリア映画「ひまわり」テーマ曲が終了した時には拍手が鳴り止まず、感動で満ち足りた興奮に会場が包まれました。また、用意した椅子は満席となり、立ち見が出るほどの盛況で、販売されたDVD、CDも演奏終了後には飛ぶように売れました。



●新スタッフ紹介

黒沢 正隆

(国際沿岸海洋研究センター・技術職員)

出身は岩手県大槌町

趣味は釣り。センター付近も幼い頃から知っている穴場が沢山あります。愛船『新山丸(0.6t)』で出る事もあります。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

故郷の海の自分の知らない一面を見られることで、新鮮な毎日です。自分の技術を生かし、安全な操船に心がけ、みなさんの研究の力になれば幸いです。

杉村 聖治

(総務課長)

出身は埼玉県さいたま市(旧浦和市)です。

趣味は孫娘との可愛いデート

将来への抱負あるいは海洋研への期待

13年ぶりに本郷キャンパスを離れ、早5ヶ月が過ぎ、中野の地への通勤、郊外部局の雰囲気にも馴染みだしたところです。大学環境が大きく変化する中、研究所の抱える様々な課題等に、今まで培った経験を生かしながら、柔軟な発想・見地に立ち、海洋研の発展と活性化に取り組んでゆきたいと思っております。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

野上 規子

(海洋底科学部門・海洋底テクトニクス分野・技術職員)

出身は大阪府岸和田市

趣味は本を読むこと、歩くことです。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

修士時代に白鳳丸に乗船させて頂いた関係で今回、勤務させて頂けることになりました。最新の海洋研究が行われている場で、色々なことを見聞できることは嬉しいです。臨時採用なので短い期間ですが、少しでも研究のお役にたてるように頑張りますので、よろしくお願い致します。

馬淵 浩司

(海洋生命科学部門・分子海洋科学分野・助手)

出身は滋賀県彦根市です。高校卒業後、仙台、愛媛(南予)、大阪、京都と移動して今に至ります。

趣味は草野球。海洋研野球部の世話役をしております。昼休みに練習しておりますので、お気軽にご参加下さい。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

昨年8月に身分が変わりスタッフとなりました。海洋研に来てから6年経ちますが、これからも所の盛上げに少しでも寄与できるよう、研究に部活に励みたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

東京大学海洋研究所

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1

Tel : 03-5351-6342

Fax : 03-3575-6716

ホームページ : <http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/>